
姉さん二人で——

夕風 渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉さん二人で――

【Nコード】

N97430

【作者名】

夕風 渚

【あらすじ】

血縁関係がない姉二人に迫られる主人公。

最初は拒みがちだったが、流されつつも主人公は――

1 プロローグ

「……くん？ ……かくん」

誰かが呼んでいる。

「来夏くん。朝だよ？」

「ん……………ああ」

若干、気が抜けたような声が喉から出る。

「準備しているから、早く下りてきてね」

あ……………。着替え——か。

「おはよ、来夏」

居間、テーブルには先客が二人。

「……………父さんと母さんは？」

「あー、二人とももう出たよ」

そう答えてくれるのは、一番上の姉——千沙姉さん。

「来夏くん、ご飯とパン。どっち？」

「あ、パンでお願いします」

こう聞いてきたのは二人目の姉——実里姉さん。

習慣——か分からないが、自分は姉二人より早く家を出る。

「んー！ 出発う！」

こいつも一緒に……………。

「んあ？」

千佳。自分の妹。

「行くよ？ 行かないと学校には着かないよ？」

「あ……………はいはい」

「坂上い」

あ……来やがった。

「よっす！」

「あー。うん」

こいつは中村真琴。あ、うん……何と言つか――。

「今日は妹だけか？」 姉上さん達は？ あの人達に会いたいぜえ」

コイツを一言で表すなら――姉萌え。

午前中の授業が終わり、机に突っ伏す……………。

「うおあ……疲れた」

「あ？ 飯、食いに行かないのか？ 俺は行くぞお」

なんで、真琴はこんなにも元気なんだ…………？

「……今起きる。待ってくれ」

食へに行く――と言っても、売店だけど。

「ん――どれにするか…………」

ジャムパン、クリームパン…………。あ、惣菜系もいいなあ…………。

「ああ、来夏。サンドイッチ買ったよ」

「あ……千沙姉さん」

行き場を求めていた手に、サンドイッチを握らされる。

「えっと……何円？」

「いーの。とつときな！」

それだけ言つて、千沙姉さんは去つて行つた。

「……いいなあ。姉つて」

真琴が何か呟いているが、無視。

――レタトマベーコンチキン 298円――

値段、書いてるじゃん……。あとで返さないと。

2 紅茶

「放課後ですよ。下校ですよ。」

家へと向かう道。

自分の周囲をちょこまかと走り回る千佳。

「早く帰りましょう！　と言いたいところですが」

「ん？」

「千佳、今日は予定があるので、とっとと兄さんは帰りなさい！
いや、兄に向って帰りなさい——って。」

「……………そうすれば、姉さんも喜ぶんですよ」

「あ？」

何かを呟いていたようだが――。

「いえ、なんでも無いですよ。では」

「あ……………うん」

「ただいま」

玄関の扉を開けると同時。

ブドウ……………だろうか。甘酸っぱい匂いが満ちる。

「おかえり♪」

居間につながる扉から実里姉さんが顔をのぞかせる。

「紅茶、飲む？」

ああ、この匂いは紅茶か。

「はい、頂きます」

千沙姉さんは既にティーカップに口をつけていた。

「ん？　来夏も飲むのか」

中央の皿にあるクッキーに手を伸ばす千沙姉さん。

千沙姉さんの向い側に腰かけ、ネクタイを緩める。

ティーカップに注がれる紅茶。銘柄は分らないが、一瞬で匂いが広がる。

「うぉぁ……………」

実里姉さんも椅子に腰かける。

「ねえ」。来夏は今度の土曜、暇？」

ん？ 唐突になんだろう。

「え？ まぁ——大丈夫ですよ」

「よかったぁ。さっき、千沙ちゃんと話してたんだけど、三人で出かけよ！」

ずい。と、身を寄せてくる実里姉さん。髪が舞い、一瞬——紅茶の香りなのか、姉さんの髪の香りなのか…………分からなくなった。

「え、えと、姉さん。この紅茶は？」

「これ？ これはね、エトワール ロゼって言う紅茶。香りはロゼワインをイメージしたんだって」

基本的に紅茶など、茶葉は実里姉さんが買ってきている。

エトワール ロゼか……。特徴的な香りだなぁ——一口含んで感想。

——あんまり、普通のと変わらない…………——
無知な自分では、その程度の感想しか出てこなかった……。

3 充実……？

さて。土曜日である。

快晴である。出掛けるのには絶好の日である。

で、準備を済ませて玄関で待っている——だが。

姉さんたち、遅いなあ……。

「お待たせ！」

「姉さん遅——」

……姉さん——だよなあ？

部屋着、制服は見慣れているけど……。実里姉さんの服装を見たと同時に、うん。言葉を失ったよ。

服とかに詳しくないので、詳細は分からないけど——少しゴシック調の服装。

腰まで届く黒髪はツインテールにしている。

つと……あれ？

「千沙姉さんは？」

玄関に姿を現したのは、実里姉さんだけ。千沙姉さんは……。

「千沙ちゃんなら、生徒会から手伝い要請が来たって」

あー……。

千沙姉さんの友人の一人に、生徒会長がいたりする。たまに呼ばれて行くんだよなあ。

「だから、今日は私と行こ！」

「あー……了解」

ん？ 微妙な違和感。

最寄りの駅。ホームに立って、列車を待つ。

「ところで来夏くん」

「はい？」

隣に立つ実里姉さんが、前を見据えたまま問いかける。

「……………好きな子とか、居るの？」

「はい？」

「声大きい」

……………なら、聞かないでよ。

と言うか、好きな子——って……………。

考えた事も無かったな……………。今の状況に甘えているのだろうか。
血縁関係が無い姉さん二人と、妹が一人。

充実——しているのか？

実里姉さんに連れられて行ったのは、紅茶の専門店だったが、
終始、その考えが頭から離れなかった……………。

4 告白……………

庭——と言っても、そう広くない庭。
縁側に腰かけ、空を見上げる。

「——充実かぁ……………」

実里姉さんは夕食の準備。

千佳は自分の部屋。

千沙姉さんは……………まだ見てないな。

「私はね、今に感謝してる」

「千沙姉さん……………」

帰ってんだ——てか、聞かれてた……………？

「母さんが再婚して、来夏が弟になって——私たちはね、可愛い弟と、大好きな人が出来た……………ね？」

好きになって！？

自分を、後ろから抱き締める千沙姉さん——。

「私は、来夏が大好きだよ……………。ライクじゃなくて、ラブで」

「っ……………！」

耳元でささやかれる言葉。

自分は——自分は……………。

「答えは、聞かないよ……………今は、来夏の姉でいいから」

「ああ……………うん……………」

姉さんはああ言ったが、意識出来ない筈がない。

家族全員が顔を合わせた食事の際も、目を合わすことができなかった……………。

一人になると、すぐにあの言葉が頭の中に響く。

『私は、来夏が大好きだよ……………。ライクじゃなくて、ラブで』

姉さんを、恋愛対象として見たことは——無い……………とは言わ

ない。でも……なあ。

「来夏くん、ちよつといい……?」

「あー……どうぞ」

部屋の戸を開けると、そこには寝間着姿の実里姉さん。

「入るね」

……。千沙姉さんの事があるから、余計なことを考えてしまう。

「千沙ちゃんに聞いたよ……」

何か。聞かなくても分かる……。

「……私も、だよ!」

目の前の姉さんが跳躍して——自分に抱きつく!?

「ラブ——なんかじゃ例えられないくらい、私は大好き!」

「ちょ、姉さん——むぐつ!」

自然に出た言葉が——。

姉さんの、唇で、塞がれる——。

「ね、姉さん……?」

「……私は、本気だから……」

5 普通……？

……。

気付かぬうちに、寝ていたか……。

昼である。

学校である。

ついでに言うと、屋上のタンク横。死角だし、誰も来ない。だから、一人で何かを考えるには良い場所。

……。姉さん達は嫌いじゃない。それに、血が繋がってないからセーフ……？

でも、なあ……。

それに、自分の感情は「嫌いじゃない」つまり、以上未満。曖昧な想いで、答えを出したくない。

それに、もしも拒んでしまえば——いや、考えるのは止そう。

「来夏……？」

「千沙姉さん……」

どうして、姉さん達は自分に近づいてくるのか……。

「昨日……」

「っ……！」

姉さんが、何を言いたいのか分かる。

知っているのだろう。昨日のことを。

「……私も、していい？」

はい？

頬を朱に染めて、俯きながら——短く告げられる言葉。

千沙姉さんはこんなキャラじゃ……。

「——ごめん」

つい最近——記憶にも新しい感触……。

.....。

どうしたらいいんでしょうか.....。

そりゃ、姉二人が自分に対して——その、あれだ。好きでいてくれたのは嬉しい。

でも、自分は.....？

普通なら、姉に対して恋愛感情を抱くなんて——普通はないだろう。

でも、普通じゃない。

普通じゃないけど.....。

きちんと、考える時間が欲しい.....。

6 睡眠……

朝起きて。

状況が変わるはずもなく。

……あれ？

「！？」

「……すっ」

「はう」

どうして、姉さん二人が、自分の部屋——ベッドで寝ているんだ！？

……落ち着いて考えよう。昨日、何があったか。

えっと……。実里姉さんが一緒に寝る！　って言いだして、それなら私も……と千沙姉さんも来て。

血が繋がってないから、何があっても大丈夫！　と両親も悪乗りして……。

……。どうしろって言うんだよ。

まだ、答えの糸口すら掴めていないのに。

てか、状況に流されている気が……。

「あふう……。おはよ、来夏——あう……。まだ眠いよお」

まだ寝ぼけているような実里姉さん——いや、どうして、抱きついたまま寝るのか。

……。いや、腕が……。谷間に——。

「あーずるい……。私も」

って、千沙姉さんも起きてたの！？

……。現在の状況。両腕を二人の姉に占領され、そのまま姉二名は眠りましたと。

いや、落ち着いていい状況じゃない！

……。

もうどーでもいいや。
寝てやる……。

当然、寝れる筈もなく。

「眠い……………」
その反面——。

「ねえ、千沙ちゃん——今日、どこに行く？」

「ん…………」。生徒会に呼ばれてないから——来夏が行くなら
いやあゝ二人とも元気ですねえ……………。
でも、正直言つと——嫌な眠気ではなかった……………。

あれ？　なんで嫌じゃないんだろう……………。

7 小孤炉さん

さて。今日一日、学校が終わりました。
珍しく、今日は一人で帰っている。

………珍しく？

「おっと、久しい顔だな」

「？」

上からの声——上から？

上って……どこから？

「こつちだこつち」

ああ、なるほど。二階のベランダですか——と。確かに久しぶりです。

「お久しぶりです、小孤炉さん」

なんか、そっち方面の名前みたく聞こえるが、作家さんで 小孤炉 はペンネームだ。

書かれた小説——てか、ライトノベルを読んだことがあるけど……。

結構面白くて、絵も綺麗で——あ、絵は関係ないな。

「また家に来てね！ あ、姉弟そろって、ね」

「あー……はい覚えておきます………」

再び歩き出す。

「ちよつと待った！」

「へ………？」

振り向くと同時、大きく弧を描いて缶コーヒーが飛んでくる！
ぎりぎり片手でキャッチ！

「……………」

「あー、持ってけ！」

表情で分かってもらえたのか、少しの思案の後、そう言われた。

……でもこれ、超甘いコーヒーじゃ……。
黄色がメインで、黒で文字が入っている。マックス——と。

8 流されているかもしれない

「ただいまー」

「おかえりー」

あれ？ 一人か……。

居間に行つて確認。

「ああ、実里姉さんか——千沙姉さんは？」

「また生徒会……ここだけの話だけど、生徒会会計が引きこもりで、姉さんがその代役に入っているんだって」

引きこもりねえ……。

「じゃあ、自分の部屋に行く——」

そう言つて、扉を閉めようとする。が——。

「待つてよ……」

「へ——？」

袖を握られ、動きを止められる。

「すぐ逃げて——そんなに私たちが嫌い？」

いきなり——なんで？

「そうやって避けられるなら——好きなんて、言わなければ良かった——」

そう呟いて、姉さんは袖を握ったまま——その目から大粒の涙を零す。

「……………」

無意識——と言うか、自然に腕が伸びて……。
ぎゅ……っと、姉さんを抱きしめていた——。

「らいかあ……………」

自分は流されているかもしれない。
それでも、自分は言つてやる。

——自分をここまで想ってくれる人を、嫌いになんてなれないし、

突き放せない。

例えばそれが、姉であつても……………」

自分の中で呟いて、姉さんに向き直る。

「ん……………」

姉さんは顔を上げ、一瞬目を合わせた後、目をつぶる。

言わないでも分かる。

だから、今は自分の意思で……………」。

身長差から、俯くような動作で……………」姉さんと唇を重ねる。

「ありがとう——来夏」

少し、変わって見える姉さん。

何と言うか……………」自分は、幸せなんだろうな。

でも、まだ終わっていないよな……………」。

千沙姉さん……………」。

9 やっぱり、流されてる？

今日は久しぶりに全員そろったの登校。
登校なのだが……………。

「来夏♪ らいか♪ ライカ♪」

…………… 実里姉さんをどうにかして下さい——ああ、原因は自分なのか……………。

「……………」

千沙姉さんの目線が怖いです……………。

「お姉ちゃん、何かいいことあったの？」

「えー？ ふふふ、秘密！」

千佳の質問と、それに答える実里姉さん……………。
そして、周囲の目が……………痛い。

「来夏——？」

昼休みである。

そして、実里姉さんに追われている……………。

屋上、いつもの場所は実里姉さんは知らない。
ならそこに逃げ込む一手！

「……………」

待つこと数分。

「行ったか……………」

立ち上がり、歩き出した刹那！

誰かに背後から抱きつかれる！？

「来夏……………」

「——千沙、姉さん……………」

後ろ——か……………タンクの陰だろうか。それなら分らない……………。
「私も、泣いたら……………キスしてくれる？」

ああ……やっぱり、全部分かっているのか――。

いずれ来ると分かってたけど、自分は選ばないといけないのか？

「ちゃんと、実里と話した………二人一緒に、いいから――」

！？

「姉だからって理由で、我慢できないよお……」

あー。

分かっているよ、自分は流されているさ。

分かっているよ。だから――。

結果。帰り道は行きよりも大変です。

実里姉さんは行きと変わらなくて、千沙姉さんは終始無言だった

――けど。

左右の腕を抱かれての帰宅でした……。

でも、嫌じゃないんだよなあ――。

10 それでも――

状況整理。

千沙姉さんの発言は本当でした。

『二人一緒にいいから――』

ちよつと待った。

黙認される二股じゃ……？

と言うか、夕食の席での事。

姉さん二人が左右に陣取って、それも交互に、

「あゝん」

攻撃……………。

寝ようとするば、二人が布団に潜り込んできて…………。

まあ、先に寝てくれたので、こうして思案しているのだが。

ここ数日で、姉さんではなく、女性として二人を見れた。

将来どうなるかなんて、分からない。けど――。

やっぱり、二人は好きだ…………。

でも――ごめんなさい。

自分は今の状況に甘えます……………。

二人の姉さんの頬にキスをして、自分も眠りにつく。

「来夏、行こっ」

「来夏、行こうか」

玄関で自分を呼ぶ二人に面と向かって、初めて言う。

「千沙姉さん、実里姉さん――大好き…………だよ」

「!？」

「えっ……？」

頬の熱さを感じつつ、靴に履き替えて走り出す！

「ちょ、来夏！」

「もう一回、言っ……」

すぐに追いつかれるけど、最初から分かっている。

「……行く、姉さん」

「「うん！」」

10 それでも——（後書き）

とりあえず、ここで終わりです。

2とか？をつけて、続くと思いますがね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9743o/>

姉さん二人で――

2010年12月28日05時10分発行